岩倉城遺跡下層の遺構と遺物
－平成元年度調査を中心として－

服部 信博

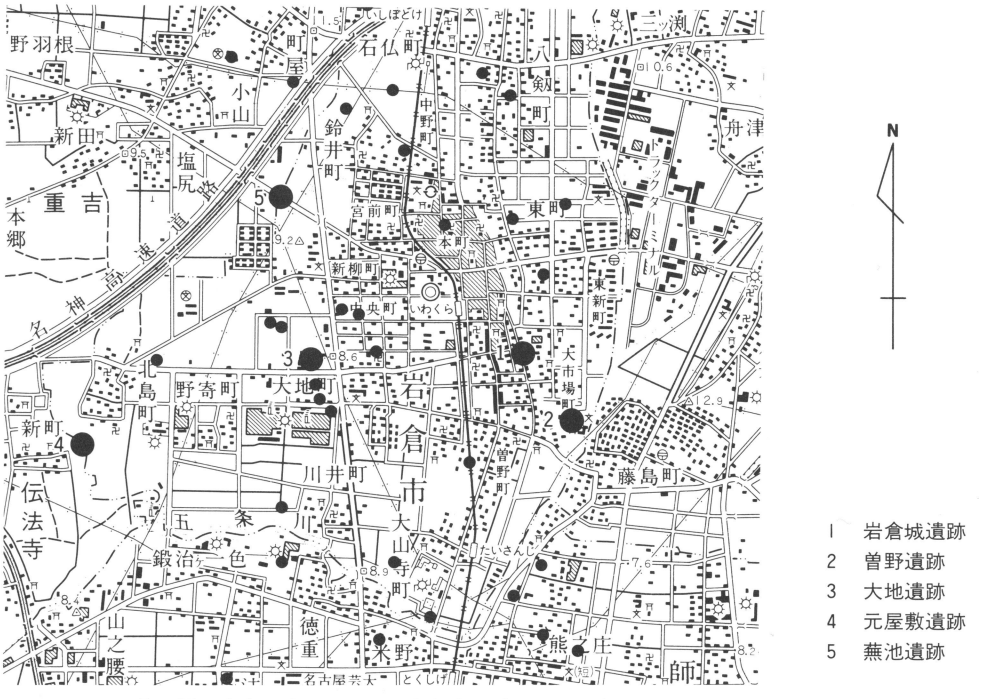
I はじめに

濃尾平野のほぼ中央部に位置する岩倉市の周辺は、犬山扇状地の扇端部にあたり、豊富な水に支えられ多くの産業・文化を育んできた地域である。また、木曽川水系の五条川や青木川の河川活動による自然堤防もよく発達し、安定した自然条件を背景に、大地遺跡や曽野遺跡など学史上著名な遺跡をはじめ数多くの弥生時代の遺跡が立地し、注目されてきた地域でもある。しかし、本格的に発掘調査が実施された遺跡は少なく、その実態については不明な部分が余りにも多いと言わざるをえない。

そういった状況のなかで、平成元年度の岩倉城遺跡下層調査において、近年盛んに議論される所謂「欠山期」の遺構と遺物がまとまって検出された。(1) これらは当地域の弥生～古墳時代の諸相を考究していく上で欠くことのできない貴重な資料と考えられ、その一部を紹介することとした。

II 遺構と遺物

平成元年度は、五条川の両岸に細長く延びる自然堤防を、東西に横断する形で調査区を



第Ⅰ図 岩倉城遺跡と周辺の弥生遺跡（1：50000）

設定したため、遺跡の構造や広がり等を把握するには良好であったと言えよう。調査の結果、竪穴住居跡８棟、集石遺構２基、方形周溝墓１基を検出し、いずれの遺構からも「欠山期」の遺物が出土した。以下、遺構・遺物の概要を記していきたい。

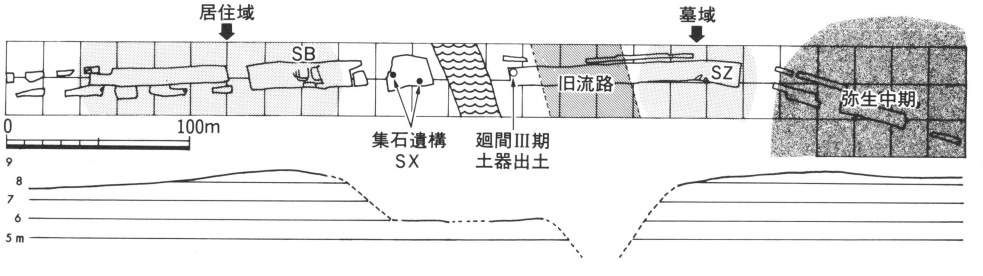
１）遺構の概要（第４図）

竪穴住居（第２・６図）　五条川右岸の標高９ｍ前後の自然堤防上で、重複する形で８棟の竪穴住居を検出した。全形の窺えるものはなく判然とはしないが、いずれも一辺５～６ｍの方形状のプランを呈する。ＳＢ08を除き、幅20cm・深さ５cm程度の壁溝が巡るが、部分的に壁溝を消失する住居も認められ、戸口等の存在を予想させる。主柱は、残存状態の良好なＳＢ06等から推定すれば、４本柱であった可能性が高い。

第２図　竪穴住居（南西から）

集石遺構（第３図）　五条川右岸の自然堤防から旧河道へと大きく傾斜していく変換点で２基検出した。検出地点の標高は６ｍ前後であり、竪穴住居が検出された地点との比高差は３ｍを測る。集石遺構は、拳大から人頭大の河原石を帯状又は楕円状に人為的に集積したものである。性格等は不明な部分も多いが、若干の出土遺物及び集石遺構を覆う暗褐色シルト層からは、竪穴住居とほぼ同時期の遺物が出土しており、それらと関連した遺構であることは明白である。

第３図　集石遺構ＳＸ01（南東から）



第４図　岩倉城遺跡下層遺構配置図（１：4000）

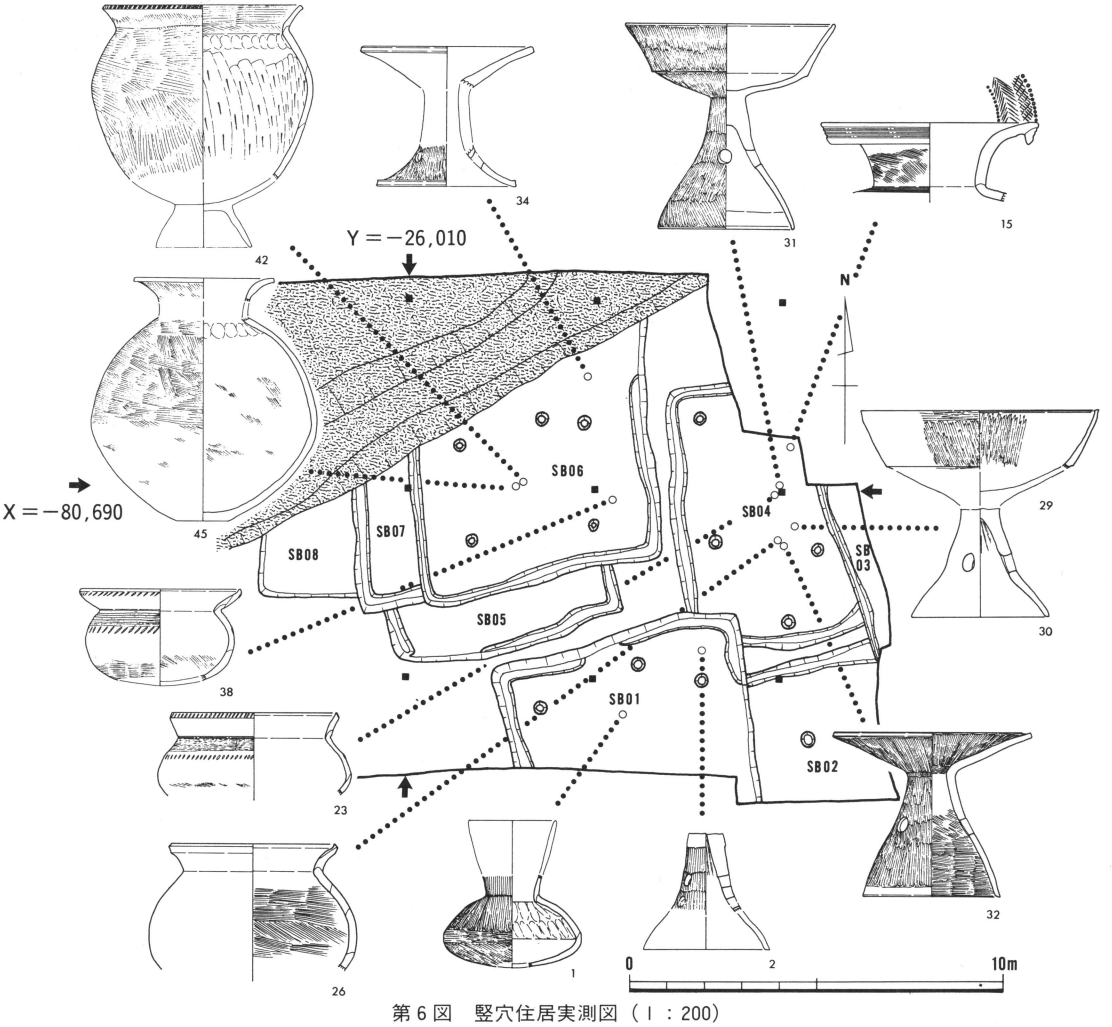
方形周溝墓（第５・12図）　標高８ｍ前後の五条川左岸の自然堤防上で１基確認した。遺構の大半が調査区外となり、僅かに周溝の一部が調査できたにすぎない。周溝は幅1.5ｍ・深さ60㎝程度の規模であり、平面形態は１ヶ所に陸橋部を有するタイプと考えられる。

第５図　方形周溝墓（北から）

２）出土遺物の概要(2)

ＳＢ01出土遺物（第７図）　ＳＢ01出土土器の器種は、壺・甕・鉢・高杯・手焙形土器からなるが、全形を窺うことができる資料は少ない。

壺（１・８・９）　１は口頸部の大半を欠損するが内彎口頸壺であり、体部は偏平で最大径を中位に持つ。外面はヘラミガキ、内面はナデ・指押えで仕上げる。８・９は広口壺の



第６図　竪穴住居実測図（Ｉ：200）

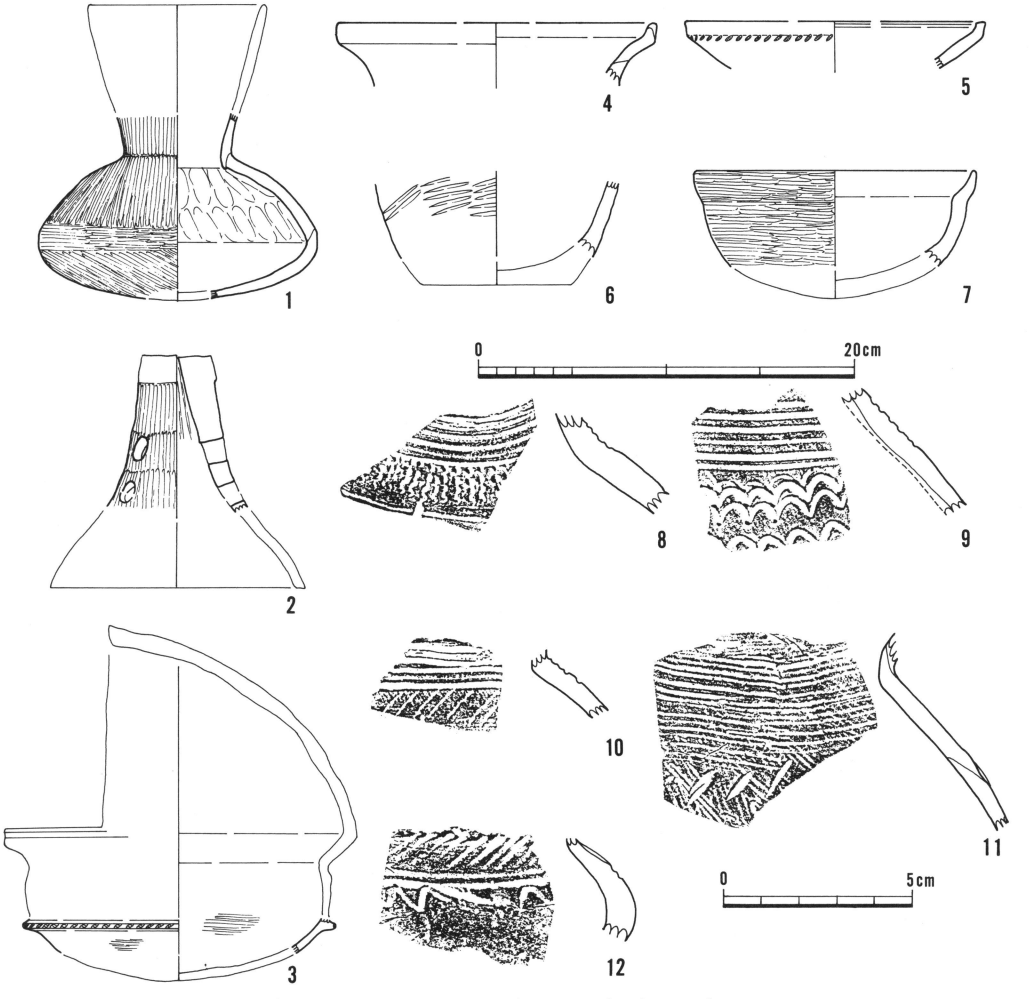
体部片で、直線文下に貝殻刺突・ヘラ描波状文を施す。

甕（4～6・10・11）　細片のみであり、鉢との区別が困難であるが、6を除き、すべて受口系口縁台付甕と考えられる。4・5は鋭く屈曲する口縁部片で端部に明瞭な面を持つ。10・11は体部上半の破片であり横線文下部にヘラ・ハケによる刺突を加える。6は外面に叩きを施す平底の甕である。

鉢（7・12）　7は浅い体部に、口縁内面を強くヨコナデすることによって短く内彎気味に立ち上がる口縁部をつくり上げる。12は、受口系鉢の体部片であり、ヘラによる刺突・横線・波状文を加える。

高杯（2）　杯部を欠損するが、やや内彎気味に外方へ伸びる長脚高杯の脚部片である。

手焙形土器（3）　細片であり全形は不明であるが、鉢部を巡る凸帯部分と考えられ、凸帯上に刻みを施す。また、内外面にハケの痕跡が残る。



第7図　SB01出土遺物（1：4、拓影1：2）

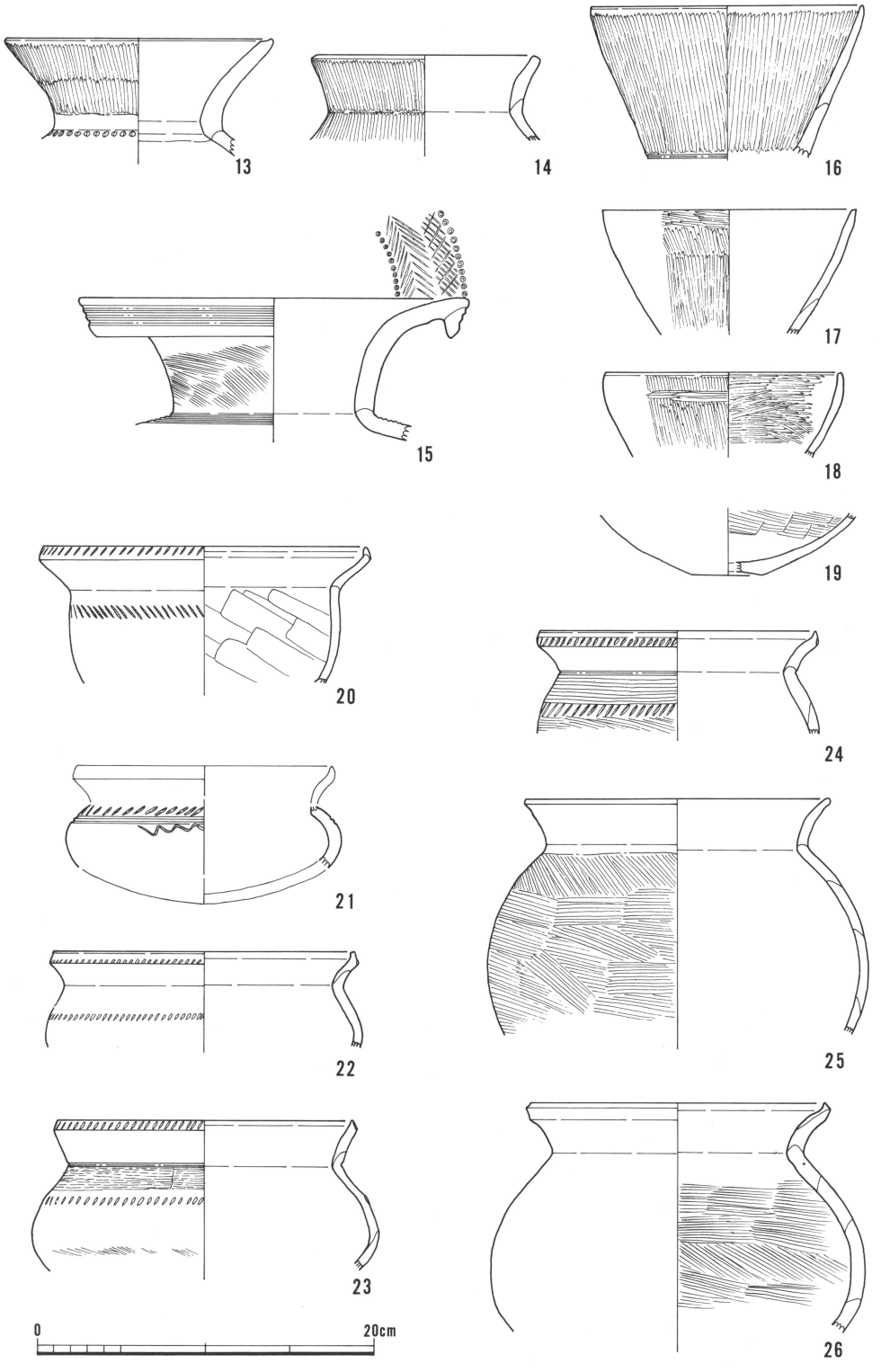
ＳＢ04出土遺物（第８・９図）　ＳＢ04出土土器は、壺・甕・鉢・高杯・器台がある。

壺（13～19）　広口壺（13～15）と内彎口頸壺（16～19）がある。13は、外方へ直線的に広がる口頸部片であり、頸部に円形の刺突を施す。14は、短く外反する口頸部を持ち、外面はヘラミガキによって調整される。15は加飾性豊かな所謂パレススタイル壺の口頸部片である。拡張・垂下した口縁部に擬凹線を施し、口縁内面には、ヘラ・竹菅による装飾を加える。僅かに残る体部には直線文が確認できる。16～18は、内彎口頸壺の口頸部片であり、緩やかに内彎しながら大きく外方へ開く。ヘラミガキ又はナデによって調整される。19は底部片であり、やや上げ底状となる。

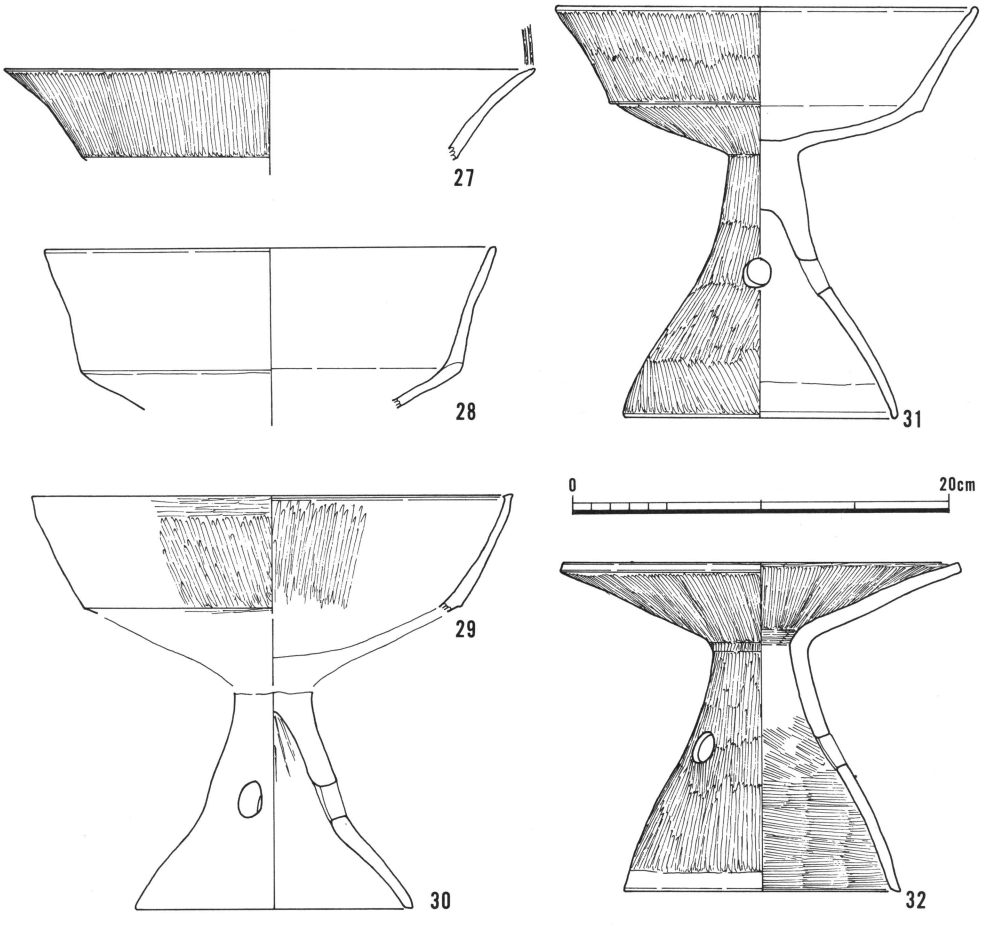
甕（24～26）　口縁部が受口状を呈するもの（24・26）とくの字状に屈曲するもの（25）との二つのタイプに分けられる。24は、台部を欠損するが当地域に一般的にみられる受口状口縁台付甕である。口縁部を摘みあげ鋭く屈曲させることによって受口状の口縁をつくりだす。口縁下部と体部横線文下に刺突を施す。26は24と同様に受口状の口縁を有するが、在地の土器には系譜のおけない異質なものである。体部は球形状を呈し、器壁も厚く、外面はナデ調整が施される等より鉢の可能性も考えられる。25は、体部から単純にくの字状に屈曲する口縁部を有する。体部外面をハケ、その他の部分をナデによって調整する。

鉢（20～23）　すべて受口状の口縁を呈するものであり、体部が口径より大きく張り出すもの（21～23）と逆に口径が体部径を陵駕する（20）二つのタイプがある。22・23は、鋭く屈曲する口縁部を有するが、その手法はいずれも摘み上げ状に整形する。体部から口縁にかけての外反は緩く、体部もやや偏平化する傾向が窺える。また体部の文様は、ヘラによる刺突は施すが、この種の鉢に特有な体部上半部の横線はみられず、ナデ又は板ナデ調整される。21は体部片であり、ヘラによる刺突・横線・波状文を施す。20は頸部から強く外反させた口縁部を鋭く屈曲させ受口状口縁とし刺突を加える。端部は丸くおさめる。体部は全く張りをもたず、上半部にハケによる刺突を加える。外面はナデ、内面は板ナデにより調整する。

高杯（27～31）　杯部の形状から、杯部が浅く強く外反しながら立ち上がるもの（27）と杯部がやや深くなり、内彎気味又は外反するが弱く立ち上がるもの（28～31）の大きく２つの器種に分類できる。27は、山中期にみられる杯部が浅く、杯部上半が外反するものであり、端部に２条の沈線を巡らす。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデによって調整する。31は、唯一全形を窺うことができる資料である。杯部下半で明瞭な稜を有し上半部は緩やかに外反しながら広がる。脚部は長脚であり、円柱から円錐状に大きく開く。外面はヘラミガキ、内面はナデによって調整する。28は杯部のみ残存するが、31と同様に中位下半で稜を持ち上半部は緩やかに外反して立ち上がる形状を呈する。内外面ともにナデに



第８図　ＳＢ04出土遺物（Ｉ：４）



第９図　ＳＢ04出土遺物（Ｉ：４）

よって仕上げられる。29と30は同一個体と考えられる。杯部は中位で稜を持ち、上半部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。内外面ともにヘラミガキ調整される。脚部は内彎気味に外方へ広がる。

器台（32）　脚部から鋭く屈曲し大きく外方へ広がる受部を持つ。脚部は高杯と同様に長脚であり、受部との接合部より内彎気味に円錐状に開く。外面及び受部内面はヘラミガキによって調整されるが、脚端部はヨコナデが施され、微妙に外反を示す細部彎曲調整が認められる。脚部内面にはヨコハケを残す。

ＳＢ06出土遺物（第10図）　ＳＢ06出土土器は、壺・甕・鉢・高杯・器台がある。

壺（43～45）　45は頸部の一部を欠損するが、ほぼ完形に復元することができる広口壺である。頸部からほぼ直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する口縁部を有すると考えられ、端部は平坦で明瞭な面を持つ。内面はヨコナデ調整されるが、外面にはハケを残す。体部

は球形状であり、最大径は中位にある。外面のほぼ全域にハケを施すが、最大径より下半部はナデにより打ち消される。43・44は広口壺の体部片であり、直線文やヘラ・クシ等による刺突が施される。

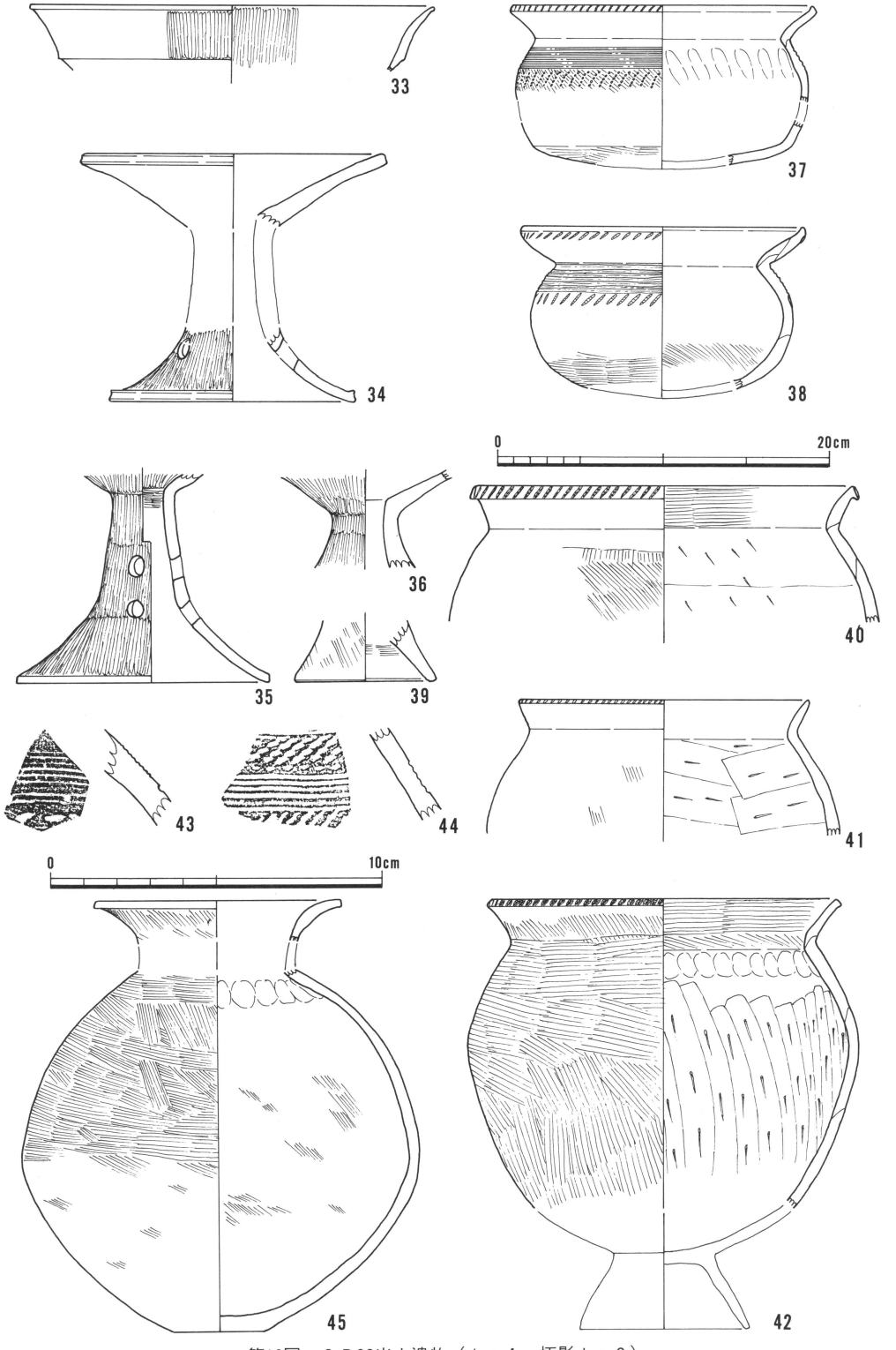
甕（39～42）　すべて体部から単純にくの字状に屈曲する甕であるが、口縁端部の形状は微妙な違いをみせる。40は体部から緩やかに屈曲し、口縁端部は平坦で垂下する。ハケ原体による刺突が加えられる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整される。41の口縁端部は、面を有さず丸くおさめる。剝落が著しく調整は不明瞭であるが、口縁内外面はともにヨコナデ、体部外面はハケ、内面は横位のヘラケズリが施される。42は台部を欠損するが、ほぼ全形を窺うことができる資料である。口縁は大きく外傾し、端部に明瞭な面を持つ。ハケ原体による刺突が加えられる。体部はやや楕円状であり、横位または縦位の粗いハケが施される。口縁内面には横位のハケ、体部は、ヘラケズリによって調整される。39はハの字状に開く台部片である。

鉢（37・38）　37・38ともに口縁端部を摘み上げることによって、受口状の口縁を形成する鉢であり、この種の鉢に特徴的な、体部上半部の櫛描横線文、口縁部分と横線文下の刺突が明瞭に認められる。37は体部から強く屈曲する口縁を有する。体部は中位に最大径をおき、下部で鋭く屈曲し底部をつくる。38も同様に体部から強く屈曲する口縁部を持つが、体部は球形状を呈する。調整はいずれもナデが基本であるが、体部下半には横位のハケが残る。

高杯（33）　山中期に通有にみられる高杯である。浅い杯部の上半部片であり、中位で稜を持ち、口縁は外反しながら立ち上がる。内外面ともに縦位のヘラミガキによって仕上げる。

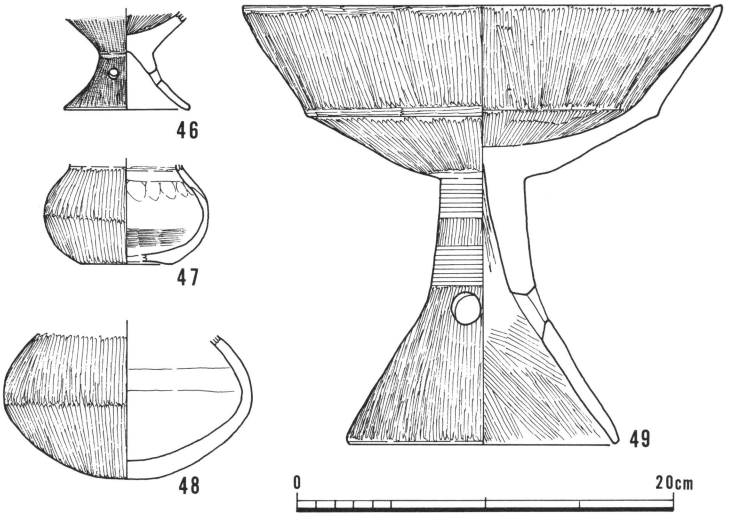
器台（34～36）　全形を窺うことができる資料はないが、いずれも同様の形態を示すと考えられる。34は脚部上半部を欠損する。受部は脚部から鋭く屈曲し、端部は平坦で面を持つ。内外面ともにナデ調整される。脚部は外反しながら円錐状に開き、端部は平坦に仕上げられる。外面にはヘラミガキが施される。35は脚部のみ残存する。外反しながら大きくラッパ状に開き、端部は面を持つ。透孔は2段3方に穿つ。外面は縦ヘラミガキ、内面はナデによって調整される。36は、受・脚部の屈曲部片である。

集石遺構出土遺物（第11図）　集石遺構からの出土遺物は細片のみであり図示することが不可能なため、ここに紹介する遺物は、遺構を覆う暗褐色シルト層（47・48）及び89C区SD01（46・49）から出土したものである(3)。47・48は口頸部を欠損するが、体部の形状より内彎口頸壺と考えられる。48は最大径を体部中位におき、全体的に丸味を帯びた形となる。47は小型品で、底部はやや上げ底状である。いずれも外面は縦方向のヘラミガキ調整が施され、内面は、ハケの残存もみられるが、基本的にはナデによって仕上げられる。46



第10図　ＳＢ06出土遺物（１：４、拓影１：２）

は小型の高杯であり、外面にはヘラミガキののち赤彩が全面に施される。47は全形を窺うことのできる資料である。中位で明瞭な稜を持つやや深めの杯部と長脚の脚部からなる。脚部は中位より大きく外方に開く形状を呈し、横線文が2段にわたり施される。三方に透孔を穿つ。



第11図　集石遺構出土遺物（1：4）

ＳＺ01出土遺物（第13図）

ＳＺ01より出土した土器は、壺2、高杯2の4点である。第12図にその出土地点を示したが、50・52・53の3点の土器は、周溝最下層より転落した状態で、51は溝底よりやや浮いた状態で出土した。

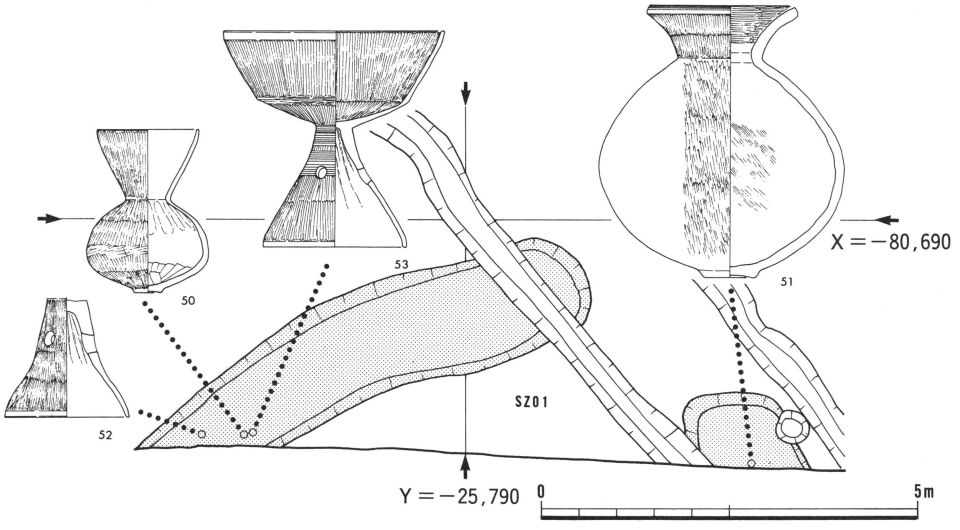
壺（50・51）　50は内彎口頸壺であり、口頸部は、大きく外方に開き、口縁部付近で緩やかに内彎する。体部は、最大径が中位より下方に移り、やや下ぶくれ状の形態を示す。底部は上げ底である。外面はヘラミガキ、内面はナデ、指押え、板ナデ等によって調整される。51は広口壺であり、口頸部は体部から強く屈曲する。口縁端部はやや肥厚し、面を持ち、凹線が巡る。内外面ともにヘラミガキで調整される。体部の形状は、最大径を中位に持ちほぼ球形状を呈する。外面は縦位のヘラミガキ、内面はハケが施される。

高杯（52・53）　53は全形を窺うことができる。杯部は下半で明瞭な稜を有し、内彎気味に外方に広がる。脚部は円錐状に大きく開き、横線文が2段にわたって施される。外面及び杯部内面はヘラミガキによって調整される。52は脚部のみであるが53と同様の形態を呈すると考えられる。52・53ともに口縁部と脚部裾部付近はヨコナデが施され、僅かに外反させる細部彎曲調整や内彎脚調整技法が明瞭に確認できる。

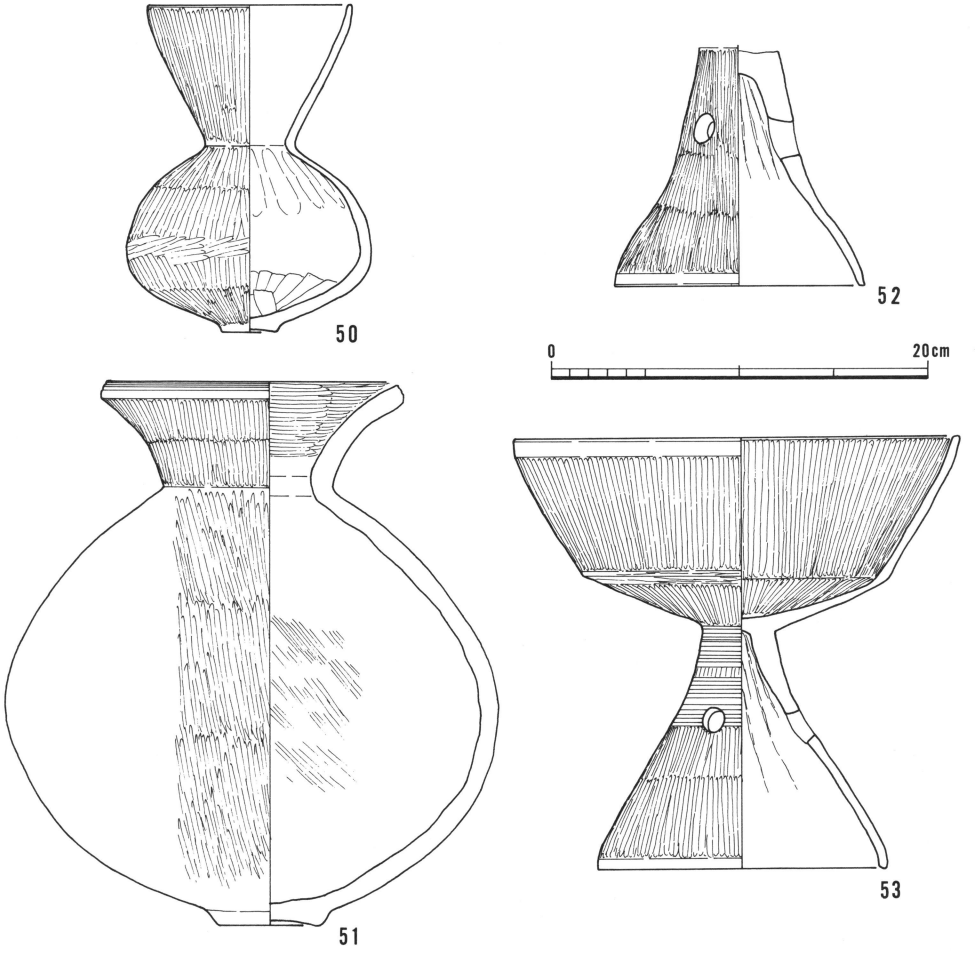
Ⅲ　まとめ

前節までに、平成元年度調査における岩倉城遺跡下層より出土した遺構と遺物の概略について記してきた。最後に出土土器及び岩倉城遺跡Ⅰ・Ⅱ期[4]における遺跡の変遷等について若干の検討を加え、まとめにかえたい。

1）出土土器について



第12図　方形周溝墓実測図（1：100）



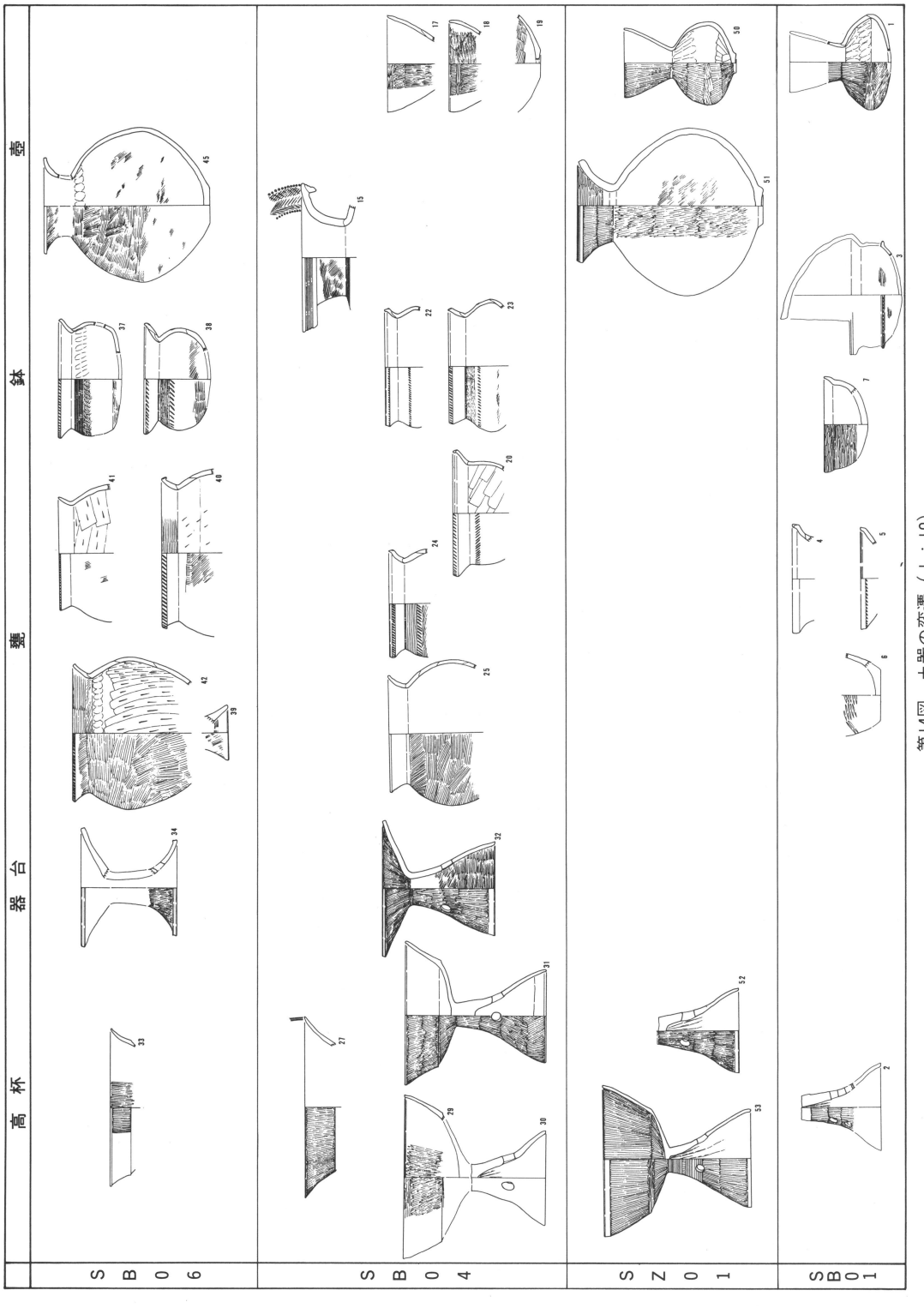
第13図　ＳＺ01出土遺物（1：4）

岩倉城遺跡下層遺構より出土した土器は、従来の編年に照らせば、「欠山期の古段階」を主体とし、比較的短期間の変遷を示す資料と言える。この「欠山期」は、当地域における弥生時代から古墳時代への変遷を捉えるうえで重要な問題を内包しているが、1968年に大参義一氏が編年案を提示[5]して以来、久しくこの時期の研究は低調であった。しかし、近年、調査例の増加に伴い当該期の再検討に関する議論が盛んに行なわれ、多大な成果を納めつつある。[6]そこで、最も詳細かつ精密な分析をすすめられた赤塚次郎氏の研究成果[7]に依りながら、岩倉城遺跡下層出土遺物について、その編年的位置付けを考えてみたい。

各遺構より出土した土器は、全形を窺うことができる資料に乏しく、また、各遺構間で出土量及び器種にバラツキがみられる等、若干の問題も残るが、第14図に示したように、おおむねＳＢ06→ＳＢ04→ＳＺ01→ＳＢ01といった変遷が考えられよう。特に、ＳＢ06出土資料とＳＢ04出土資料との間で、土器の形態等に大きな変化を見出すことができる。ＳＢ06出土土器は、山中期に通有にみられる杯部が浅く上半部が外反する高杯、口縁部に刺突文を施し、内面ケズリ調整を持つくの字甕、外反しながら大きく開く脚部を有する器台、体部に明瞭な横線文を施し、口頸部が強く屈曲する受口系の鉢等からなる。それに対し、ＳＢ04出土土器は、高杯・広口壺等にＳＢ06出土土器段階にみられるような古い様相も残る[8]が、内彎志向を持つ高杯・器台の登場、口縁端部に刺突を有さず、内面ナデ調整のくの字甕、体部の横線文は消失・形骸化し、口頸部の屈曲が弱く外傾する受口系の鉢[9]等全体的に新しい様相を看取できる。とりわけ、器台の脚部裾に施される細部彎曲調整の出現は印象的であり、廻間期の開始を特徴づける技法[10]である。よって、ＳＢ06とＳＢ04出土資料との間に大きく一線を画し、ＳＢ06出土資料は、山中様式新相終末期（瑞穂４次ＳＢ02段階）に、ＳＢ04出土資料は、廻間Ⅰ式１段階の古相に位置付け、以降の土器を古式土師器の範疇として捉えたい。次に、ＳＺ01出土資料であるが、調査区の制限もあり、出土量は少なく検討すべき土器は壺・高杯に限られる。形態の変化が明瞭とされる高杯の形状は、廻間遺跡分類の高杯A_2の誕生期の形態に酷似しており、口縁端部における細部彎曲調整・脚部の内彎脚調整技法も明瞭に確認でき、廻間Ⅰ式１段階の新相に位置付けられる資料と言えよう。また、内彎口頸壺も体部の形状が下ぶくれ状となり、当該期の様相を示す。ＳＢ01出土資料は、全形を窺うことのできる資料が存在しないため、不明な部分も多いが、内彎口頸壺の体部は偏平化しており、ＳＺ01出土資料より、明らかに後出的な様相を持つ。小片ではあるが、受口系の甕は、廻間３期にみられる口縁部の立ち上がりの縮小、刺突文の省略されるものもみられ、廻間Ⅰ式２段階に比定することができよう。

２）遺跡の変遷について

岩倉城遺跡は、五条川の両岸に形成された自然堤防上に立地する遺跡である。この微高



第14図　土器の変遷（1：10）

地上で展開した岩倉城遺跡Ⅰ・Ⅱ期における遺跡の変遷について簡単にまとめてみたい。

調査により確認されたⅠ・Ⅱ期の遺構・遺物は、縄文時代晩期や弥生時代中期のものもみられる(11)が、それらはいずれも局所的な存在であり、遺跡全体を通して安定したヒトの定着は認められない。五条川流域の自然堤防上に居住域と墓域を設定し、集落としての様相が整いだすのは、弥生時代後期（山中期(12)）以降のことであり、その主体は、前述した遺構と遺物より山中様式新相から廻間Ⅰ式前半におくことができる。その後、遺跡は急激に衰退する傾向が窺え、僅かに廻間Ⅲ式後半期に祭祀的色彩の強い遺構・遺物が認められるのみとなる。しかし、それは特異な場所に築かれた単発的な存在であり、日常生活を語るものとは考えられない。(13)再び、ヒトの動きが明確となるのは、5世紀後半以降のことである。自然堤防上には方墳・集石墓群といった墳墓が築かれるようになり、遺跡は広く墓域として展開していく。(14)

小文を成すにあたり、赤塚次郎氏、岩中淳之氏をはじめ多くの方々に有益な御教示を頂いた。文末ではあるが謝意を表する次第である。

註

1）服部信博・金子健一1990「岩倉城遺跡」『年報　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター・服部信博1991「“幻の城”から“現実に存在した城”へ－岩倉城遺跡の発掘調査を総括して－」『広報いわくらNo.475』等に簡単ではあるが、その概略を紹介しておいた。

2）以下、使用する用語等は、赤塚次郎1990「廻間遺跡」㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集におおむね従った。

3）89C区SD01は、岩倉城の外堀に比定される遺構であり、堀の最下層より「欠山期」の遺物が多数出土した。これらの遺物は、堀の築造に伴い、集石遺構を覆う包含層を掘削した結果の所産であると考えられる。

4）岩倉城遺跡は出土遺物よりおおむね6時期に区分される。Ⅰ・Ⅱ期は縄文時代晩期から古墳時代までを指す。

5）大参義一1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ⅩLⅤ11

6）1986年に開催された「欠山式土器とその前後」（第3回東海埋蔵文化財研究会）と題するシンポジウムを契機として、赤塚次郎・加納俊介・宮腰健司の各氏らを中心として研究がすすめられ、当地域における弥生時代から古墳時代に至る土器の変遷が明らかにされてきた。

7）赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集及び同氏1991「古墳時代の時代区分と集落の動向－濃尾平野を中心として－」第91回愛知考古学談話会資料

8）第8・9図の15・27は山中期に通有みられる形態であり、混入した可能性もある。しかし、遺物の出土状況は、他の土器とともに床面に密着した状態で出土しており、古い様相の残存と考えたい。SB04出土土器と同様の状況は、廻間様式圏内の三重県伊勢市隠岡遺跡SB44出土遺物にもみられ、山中型高杯と内彎する高杯が共伴している。岩中淳之1987「隠岡遺跡発掘調査報告」伊勢市教育委員会

9）従来、不鮮明であった受口系の鉢は、本遺跡出土例よりみるならば、SB06→SB04の形で変化すると考えられる。しかし、当該期の受口系鉢の出土例は少なく、他遺跡との比較検討をすることができなかった。当地域の変化に適用できるか否かは、将来の資料の増加を待ちたい。

10）赤塚次郎氏御教示

11）服部信博1991「岩倉城遺跡」『年報　平成2年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

12）昭和63年度の調査において、山中期の遺構が若干検出されている。松原隆治1989「岩倉城遺跡」『年報　昭和63年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

13）服部信博1990「岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

14）五条川右岸で方墳を1基（6世紀前半）、左岸地区の調査で方墳2基（5世紀後半以降）と集石墓群（6～7世紀）を検出している。前掲註（11）・（12）参照